

『しょんぼりしょげるくん』

十数年ぶりに降り立った故郷は雨だった。

「まだおったんかい」

物心ついた頃から駅の象徴として立ち続けているカエルの置物を見つめていた。

〈一生帰ってこうへんかと思ってたわあ〉

カエルの声が、頭の中で弾け飛ぶ。

〈おかえる〉

「ケロン、それを言うならおかえりやで」

学生時代の名残が今も身体に染みついていることを知って、毎日のように遊んでいた幼馴染の顔が浮かび上がってきて、誰がケロンって名付けたんやつけ？ と考えた時には、懐かしい心持ちに包まれていた。

「マツケンもヒロシも元気にしてるかなあ」

時折、雨の音が耳に響く。

忘れかけていた出来事が奥底からドンドンドンと溢れてくる。

「なんで帰らへんかったんやろ」

鼻から空気を吸った。ただす糺の森でカラスが鳴いた。

導かれるように、あの日も雨やったなあ、と恋しんで印象的な記憶にひた浸っていく。

小学校からの帰り道。ひとり雨の中を歩いていると、強い風が吹いて差していたビニール傘が逆さまになった。びっくりして、急いで元に戻そうとしたけど戻らなくて、骨組みが壊れていることに気が付いたとき、心がボキリと折れる音が聞こえて助けを求めたくなかった。

周りには誰も居なくて、寂しだけが膨れ上がって、容赦なく打ちつけてくる雨粒が針のように痛くて、独り濡れながら家まで帰る道のりが果てしなかったのを覚えている。

「……ビニール傘が折れただけやったのになあ」

生まれ育った土地に足を着けなければ対面していないであろう領域まで潜って、嫌でも時間は刻まれていくことを把握して、少しは大人になれたんかなあ、と心を働かせてからもう一度ケロロンに目を向けた。

〈なんで帰って来たあん？〉

反射的に、親指の爪を噛んでいた。
連想して、妹からの電話を思い浮かべる。

『お父さん倒れたからイイ加減帰って来て』

口先から離れた親指を見つめていると忘れられない場面を思い出しそうになったから逃げるように噛み直した。

〈ツツパれない男の子の勲章は爪を噛んだ跡やんなあ〉

カエルの置物は変わりなくケロケロケロと笑っている。

〈一緒に手繋いで行ったらあかあ？〉

余計なお世話や、と心の中で呟いて、ケロロンに背中をむけて歩き始めた。

改札の前で大きく手を振っている母親を見つけて照れを隠すために白々しく近づいていく。



「マツケンは消防士になって、ヒロシはウンコ漏らしてるんとかうか」

運転席に座る母親に『ひさしぶり』なんていう言葉は見合わなかった。昨日も一昨日も一緒に過ごしていたかのような立ち振る舞いに驚きと桃の木が隠せなかった。

「ヒロシはようウンコ漏らしとったなあ。多分な、元々お腹が緩いんやわ。ウチでも三回漏らして二回目が一番臭かった思い出あるもん。お母さんよう覚えてるやろ？ 茂、しげる凄

いと思ってたら素直に凄いつて言うたらええんやで？」

山椒の木も現れて、

ひしめき合って騒ぎ始めた。

「弁護士になったんとかうか」

「何が？」

「ヒロシに決まってるやんか」

「話飛び過ぎや」

「法廷でウンコ漏らさんかったらええけどなあ」

どこまでも我が道を貫く人やなあ、と呆れながらも、すぐに言葉に表せる母親が羨ましかった。連想して、消防士姿のマツケンと、弁護士姿のヒロシが映し出されたけど、高校を卒業して以来一度も会っていないから漠然とした人物像だけが独り歩きして居場所を見つけられずに立ち去った。残されたのは、お尻を押さえて今にも泣き出しそうなヒロシの切ない表情一つだけだった。

「ここの公園であんたブランコばかりしてたで」

よく遊んだ公園を一瞬で通過した。

「寝る前はいつも本読んで欲しそうにしてたなあ」

ジャックと豆の木の特に好きだった一節が頭の中に現れた。

「今日の夜はホワイトシチュー作ってあげるからな。アンタ好きやったやろ？」

今でも、大好きだ。

「七海^{ななみ}がブラウンシチュー好きやったからよう我慢させられとったやろ？ だから今日はアンタの好きなホワイトにしてあげるわ」

「いくつやと思てんねん」

「いくつになっても息子は息子のままや」

母親の強かさを直^{じか}に感じて、

ずっと守られていたんだ、と今更知った。

「七海は何してるん？」

「実家でずっと親のスネ齧^かってはるわ。そろそろ出て行くって言うて五年以上経ってるんとかやうか。あれは出る出る詐欺で訴えられるレベルやで。あ、お母さんええこと思い付いたわ。ヒロシに相談して弁護^{べんご}してもらおか。尻拭^{しりふ}いてパンツ変えてあげた借りがまだ三回も残ってるからタダで弁護^{べんご}して貰^{もら}えるやろ。そうでもしいひんかったらあのアホ、スネがすり減るまで齧^かるつもりやで。ホンマ、茂^{しげ}みたいになんか自立^{りぞく}してくれたら嬉しいけどなあ。でも、甘えられへんくなったらそれはそれで寂^{さび}しいんかもなあ」

都会での暮らし、

案外、頑張っているのかもしれない。

「もうちょっと静かにできひんの？」

あれ、いつ振りだろう。

気を遣^やい過ぎた言葉じゃないの。

「アンタのこと心配して盛り上げてあげてるんやんか。病院行ったらまたお父さんに何か言われて半ベソかくで。小さい頃しよっちゅう『しょんぼりしよげるくん』って言われてベソベソしてたんやからな？ その度にお母さんが慰めてあげてたんやからな？ お父さんもお父さんで面白^{おもしろ}がって何回も言わんでええのにな。あ、思い出したわ……」

終わりの見えないマシンガントークからオサラバして、
外を眺めると、雨の勢いが増していた。

目の前の信号が青から赤に変わろうとしている。母親のブレーキを踏むタイミングを味わって身体が勝手に和んでいることを掴んだ。

流れるように、傘を差しながら歩く少年の姿が視界に入ってくる。小学校低学年くらいだろうか？ 雨風にも負けず一生懸命歩く少年と、当時の自分を重ね合わせて、胸が締め付けられるような感情に襲われて思わず親指の爪を噛んでいた。

運転席から視線を感じる。

ちいさく微笑むだけで、言葉は飛んでこなかった。

助手席の窓に映る自分自身と目が合って、忘れられない場面を思い出す。

『しょげてばかりやとしよげるくんになってしまうで』

あの日、折れたビニール傘を握りしめながらやっとの想いで辿り着いた玄関先で、「どないしたん？ シャワー浴びておいで」と声を掛けてくれた母親に安心したのを覚えている。

言葉通りに風呂場へ向かおうとした時、ソファに座る父親の活気づいた声が耳に届いた。

「茂、またしょげてんのか？ しょげてばかりやとしよげるくんになってしまうで！」

冗談であると分かっているのに、ビショビショの体が心にまで染み渡っていくのを感じ取る。言い返したいけど、いつも勇気が出なかった。悔しさを押し殺すために親指の爪を噛んで落ち着かせるのが精一杯で、みかねた母親が濡れた頭を撫でてくれた感触が今もどこに残っている。

「会いたいって言うてたで」

信号は、青に変わっていた。

「誰が？」

「お父さんに決まってるやろ。茂が上京するって決めたときも寂しがってたんやで」

「直接言われてないから分からへん」

「それはお互い様やろ」

いつの日からだろう、
会話が途絶えたのは。

「お父さん大丈夫なん？」

「自分で聞いたらええわ。十数年ぶりの親子の会話イン病室。これはお涙ちょうだい展開やでホンマに！」

一体、何を話せばいいのだろう。

「もうすぐ着くから心の準備体操しときや。ラジオ体操流したるか？ 第一がええか？ 第二がええか？ この後、お母さん用事あるから一緒に行かれへんで」

「え、来てや」

「もう子供ちゃうんやから一人で行きや」

「さっき息子は息子のままやって言うたん誰？」

「さっきはさっき、いまはいま。うちはうち、よそはよそや」

「なあ、もう少しまともな会話できひんの？」

許した心が、

刺々しい言葉を吐き出させていた。

「久しぶりに帰って来たからいっぱい喋ってんのに何がまともな会話できひんのやねん。アホかこのバカ息子が」

「月に一回くらい電話してるやん」

「電話で満足する親がどこにおんねん。いつでも会いたいに決まってるやろ！」

母親の言葉数に負けないくらい雨粒が降っていた。七海はお母さんに似たんやろうなあ、と思ったところで病院の駐車場の文字が目止まった。

**

あからさまに老いた姿を眺めて、時間ときの重さが分厚く伸し掛かる。
寝息を感じて、目を覚ましたら何を話そうかと、ぐるぐる考えていた。

〈いつまでビクビクしてるつもりなあん〉

ケロロンの声が、頭の中で弾け飛ぶ。

〈このままでええのお？〉

言われなくても分かっている、と心の中で言い返して父親の寝顔に視線を移す。
心なしか、弱々しく見えた。

『茂が上京するって決めたときも寂しがってたんやで』

母親の言葉が胸に染みていく。

連想して、傘を差しながら一生懸命歩いていた少年の姿を呼び起こす。

「家に帰って褒めてもらえたかなあ」

彼はどんな大人になるのだろうか。

親指の爪を見つめて、そっと隠した。

〈なんで上京しようと思ったあん？〉

姿の見えないケロロンの問いかけに、上京してなかったらどうなってたんやろう、と確かめようのないもう一つの人生に焦点を当てかけたけど、どれだけ探しても見つからないことを察して素通りした。

「消防士と弁護士かあ」

二人共になりたい自分になれたんなあ、と考えた時には、『ジャンケンで負けた奴がケロロンの前で一発ギャグな』と言い出したマツケンの姿と、大はしゃぎして奇妙なダンスを披露するヒロシの姿が芽ずる式に現れていた。流れに身を任せるように、ほとぼしる記憶に浸っていく。

高校からの帰り道。駅に着くと雨が降っていて、『夕立やし雨宿りして待って』って

マツケンが言い始めて、ケロロンに一発ギャグするところまで来たのに、急に、曇り空とか、雨の音とか、二人の声とか、過去の記憶とか、これからの未来とか、言葉にできない想いが一斉に現れたり消えたり捻じれたり挑んだりしてきて傘も差さずに駅を出た。

引き留められることもなく、『ギャグしてから帰れや』とか、『自信ないんけ』とか、散々言われた後に、『風邪引くなよ』とか、『明日学校来いよ』とか、思いやりに満ち溢れた言葉を掛けてくれたのに、それすらもムシクシヤする材料と化してしまっただけで大声出したら空も心も晴れるかなあって、おもいっきり叫んだ。

バカヤロー

一秒もしないうちに、『おまえがな』って二人の揃った声が返ってきたときは、自分が一番分かっている、と小声で嘆いて全速力で駆けだした。

あの頃は意味もなく不貞腐れて、

今じゃないどこかへ足を運び続けたかった。

立ち止まる度に心が張り裂けそうになって、

理由も分からないから、

遠く離れば何かが変わると信じたのかもしれない。

「お母さんは？」

父親の声を聞いて現実世界に戻ってきた。

「用事あるからどっか行っただけ」

意表を突かれて、

顔が引きつっているのが丸わかりで、

目を合わせようにも身体が言う事を聞かなかった。

「……」

「……」

話そうとすればするほど、

鉛のように重たい本音が踏みとどまろうとしてくる。

「……」

「……」

本当は、

病気の具合を尋ねたり、

上京してから一度も帰らなかったことを謝ったり、

伝えたいことが山ほどあるのに素っ気ない態度が滲み出てしまう。

「……」

「……お母さん、寂しがってたで」

「……」

窓越しから、

雨の音が聞こえる。

「……」

「具合、大丈夫なん？」

「……」

「……」

「……内緒や」

「……」

「……」

窓越しから、

風の音まで聞こえてくる。

「……」

「……昔もよく囓んどったなあ」

知らない間に、親指の爪を囓んでいた。
咄嗟にポケットに忍ばせた。

「しよげてばかりやとしよげるくんになってしまうで」

父親の弱々しい声が耳に届いた。瞬間、今の今までどこに隠れてたんや、と思わざるを得ないくらいの記憶が次から次へと湧いてくる。

ブランコを押してくれて、
頭を撫でてくれて、
ジャックと豆の木を読んでくれて、
抱っこしてくれて、
プリンを買ってきてくれて、
一緒に手を繋いで家まで帰った。

「……」

たくさん、褒めてくれた。

「……」

「……」

「……小さい頃なあ、茂よりもしょんぼりしてたわ」
少し驚いて、ようやく目が合った。

「よく帰って来たなあ。ありがとう」

強張っていた肩の力が抜けて、軽やかになっていく。

「……一回も帰らんでごめんな」

もっと早く帰ればよかった、
と、悔やんだ時には、
あと何回会えるのだろう、
と、生々しい真実を背負っていた。

「父さん元気になったら東京遊びに来たらいいわ」

ぐるぐる考えることなく、
嘘偽りない言葉を伝えている。

「東京人多いやろ」

「……」

「でも、東京ドームは見てみたいなあ」

「いつでも来たらしいわ」

「こないだ茂が好きそうな中華料理の店見つけたわ。今も麻婆豆腐好きなんか？」

「よく覚えてるなあ。お父さんはチンジャオロースばかり食べてたなあ」

「チンジャオロースが一番好きや」

「東京にも美味しいところあるから一緒に行こや」

「……ええなあ」

ひさしぶりに、

優しい気持ちになれたよ。

「来月も帰って来るわ」

震えながらも、

爪の形が変な親指を立てていた。

「……嬉しいなあ。帰って来てくれて、ありがとう」

カーテン越しから見守る母親は足音を立てずに去っていく。
鼻歌だけが残されて、舞い散るように揺らいでた。